

続「奔馬と御者」

...日本は、アメリカのように南北戦争時代の農耕民族、狩猟民族の対立と金融大恐慌の混乱を克服し、自らの力で国際投資循環拡大メカニズムを作ることができるのか？

接ぎ木、物真似、農耕民族調整型財政・金融システム依存 60 年の錯覚から目を覚ます時がきた。

(2005 . 8)

シンクタンク藤原事務所
リサーチアソシエイト

国際資本市場ストラテジスト 園 山 英 明

目 次

証券・金融・資本市場経済先進国アメリカが克服した南北戦争対立と金融大恐慌脱出の歴史から学ぶ証券・金融・資本市場経済における国家の役割

日本では何故、アメリカ大恐慌の原因解明の歴史が学べないのか、学ばないのか、学ばせないのか

証券、金融、資本市場経済メカニズム用語の分裂が招いた日本の市場経済メカニズムの混乱

イギリス型 消費者保護・「金融サービス市場法」的資金経済発想だけでは脱出できない日本が陥っている証券・資本市場経済のブラックホール

これからの日本・・・まず日本版アメリカ南北戦争時代の対立（農耕民族と狩猟民族）を克服し、内向き資金依存資本主義から外向き生命資本競争主義への挑戦

証券・金融・資本市場経済先進国アメリカが克服した南北戦争対立と金融大恐慌脱出の歴史から学ぶ証券・金融・資本市場経済における国家の役割

・・・公益、通商、国の信用崩壊を防ぐために制定した証券規制（1934年証券取引所法第2条・・・ securities regulation）と証券市場を維持・強化すべき国家の重要な財産と位置づけた全国証券市場システム（1975年に追加した証券取引所法第11A条・・・ the securities markets are an important national asset which must be preserved and strengthened.）

1 「証券・資本」市場と日本の現状

・・・「資金」経済から「資本」経済へ転換の難しさ

- ・ 景気は多少上向いても、企業業績が回復しても、日本全体は未来への展望を見失って暗いよどみの中に沈んでいる。
- ・ それは 2000 年もの長い間日本を支えてきた農耕型社会が崩れ、国際的な大交流時代を迎えて、財政・年金・資産などの長期信用経済基盤がゆらぎはじめたことにある。
- ・ 問題は、国際的大交流時代の中での国家の役割が変わりはじめていることにある。それは、与えられた天地空間の security(安全)を守ることから、市場経済の掟、security(innovation risk 挑戦、頭脳競争力)機能を生かすことへの転換である。
- ・ この国際化の進展とともに世界の競争手段は軍事 資金 通商 security (innovation risk 挑戦、頭脳・先見力・株式・資本)メカニズム グローバル化へと変わってきてつつある。
- ・ 現在の日本がモデルとしてきたアメリカは既に 150 年も前に南北戦争の対立、金融大恐慌を契機に security (証券・ベンチャー)を国家の戦略頭脳を中心軸におき、Wall 街(investment bank)、SEC・FTC・FRB・世銀・IMF などを国会・国防省と並ぶ経済戦略本部と位置づけ、グローバル戦争の主役として育ててきた(後述)。
- ・ 今日本では、アメリカ型の security(innovation risk 挑戦、株式、資本、頭脳)機能の重要性に目覚めさせられる諸現象(貸株・空売り、

ライブドア、西武、カネ紡、取引所、郵貯問題)が噴出しはじめ、日本でもやっと「証券・資本」市場型経済メカニズム競争の本質・究極の目的が生き死を競う戦争に通じていることが分かりはじめた。

それは資金繰り上の「国債」「資金」がいくらあっても innovation 活力を生む「産業」をベースとする「株式・資本」投資循環通商拡大メカニズムを持たない国はやがて生命力が退化し衰退することを示しているからである。

- ・ 同じ証券 (security) でも未来挑戦「資本」としての「株式」と、福祉平和社会維持のための「資金」繰り「国債」とでは全く逆のことを意味しているのである。

2 アメリカを金融大恐慌から脱出させ未来の繁栄に成功したのはペコラ委員会（1932～上院銀行・通貨委員会）の活躍にあったと言われているが、その英知とは何であったか。

…それは南北戦争対立後やっと設立された中央銀行（FRB）、公正取引委員会（FTC）制度の不備について発生した大恐慌の経験から動物型 speculation エネルギーを活用する未来指向拡大資本主義市場経済メカニズムの軸を支える国家胴元（公益）としての「**頭脳機能**」にまで踏み込んでそのメカニズムの欠陥を解明し、対応策を建てる英知を持っていたことにある。

- (1) 証券・金融・資本市場経済メカニズムの頭脳機能の欠陥を解明したペコラ委員会（1932～34 上院銀行・通貨委員会…通称 ペコラ委員会）の開催を求めた国会決議（res84.56.97）

それは「under the taxing power or other federal powers」

「**徴税力と国権のもとに**」必要とする立法をするため

銀行活動に関する証券取引活動について、市場経済メカニズムを混乱させる原因と考えられる強者による「独占乱用」から発生する「メカニズムの歪み」を解明するための調査であって、日本で言われている不正取引を摘発するだけの目的で行われたものではない。

この銀・証問題を中心に調査することを国会が求めたのは、自由競争をめぐる南北対立、農業（南）から工業化（北）、antitrust 問題、奴隷経済からの脱却、銀行資金経済から証券資本経済へと発展する市場型経済メカニズムの変化の中に、資本主義市場経済国家としての命運にかかる致命的な欠陥が潜んでいることを自らの力で知ったからである。

(2) そしてこの委員会における調査（1932～1934年）活動によって証券取引所・投資銀行・商業銀行・投資信託・脱税などの証券・金融を一体化した取引活動について

unsound, abuse, (tax)avoidance などの（不健全，濫用，税を免かれる）

「ゆがみ」の実態を reveal(新しい事実を探し出す)することによって、その後の適確な立法などの対応策をたてることに成功した。

(3) この「ゆがみ」の根本原因を解明しそれを正すという「真理」をベースとする新しい資本主義経済国家の再建の基礎となるルールとして（1933年）銀行法とともに（1934年）証券取引所法が制定されることとなり、この委員会の終盤にその公聴会（hearing）が行われたが

その立法説明には先ず「FRB（中央銀行）」のエコノミストが行っていること

draft の議論は「証券」(security) が自由・平等原則によって守られるべき憲法上の「commerce」...商工... 一体の通商... 国家の主力エンジンに該当するか否かの論争と

speculation 活動を支えて来たブローカーズローン (security credit) の暴発が大恐慌を引き起こした「証券」「銀行」業務共通の大課題であるとして取り上げられ、FRB による証券・金融一体の信用規制 (regulation T ほか) についての大論争が行われた

それは従来それぞれローカルベースで規制されていた「証券」と「金融」メカニズムを「産業」をベースにした「証券」市場と、「金融」市場を一体のものとして捉えて自由・平等・競争促進という国家の独立理念を実現する国民経済の基本メカニズムとしての観点から議論された。

(4) 1934年(証券取引所法)第2条「規制を必要とする理由」

このコペラ委員会における公聴会を経て制定された証券取引所法第2条において、証券取引について各種の連邦規制を必要とする理由が明らかにされ、立法趣旨が説明されているが、その内容は

- ・ 憲法 1・8・3 「commerce regulation」の「通商規制」に基づくアメリカ独禁法 anti trust law による「公正競争推進規制」の必要性に加えて
- ・ アメリカ型証券、金融・資本市場メカニズムの特色とする金融エネルギーの証券市場参入によって増幅される speculation エネルギーを活用した新しいタイプの証券・金融・資本市場メカニズムを推進し制御することの重要性である。

そして、今までの実物経済を律してきた通商規制、独禁法規制哲学にはなかった証券・金融・資本市場メカニズムを一体のものとする新しい考え方による制御の工夫が必要であることが改めて確認された。

その新しい視点からの規制とは

今までの憲法通商規制による独禁法規制・FRB 規制など「実物市場経済取引」の規制ではカバーすることの出来なかった「証券」「金融」エネルギーを結合させ、その爆発力を利用して未来を先取りする「投機信用システム」の暴発と不公正取引の乱用によって発生する副作用を封ずる為の工夫である。

それは市場価格を利用して行われる再担保金融システムなどによって実物経済取引価格と市場取引価格が連鎖的に反応し、参加者全体の中で独占(abuse)の乱用が拡がり、その過当投機暴発力によって市場経済品質が歪められ実物経済だけでなく財政・金融など国民経済システム全体の規模が「異常な膨張」と「収縮」を繰り返すことにあ

る。

そして、最終的に投資家、預金者、消費者、納税者、勤労者など一般市民の「社会生活」「産業経済活動」から最終的には「国家財政」までもが崩壊してしまう恐ろしさから生まれている。

問題は見せかけの繁栄騒ぎのあとに襲いかかるデフレ「収縮」というメカニズム崩壊の危機を避けることにある。そのためにはまず、投機信用力を利用して実物経済を刺激し未来を先取りする「波動経済のブレ」を事前にコントロール可能な範囲の巾の中に封じこめ暴発による失速を防ぐ為の制御機能が必要とすることにある。(失速防止対応策)

そのためには、まずブレ易い波動経済の中心軸となるべき国家公益軸(胴元としての徴税力、戦略理念・戦略頭脳力、会参加者で共有する評価、計測機能、金利・価格メカニズムのコントロール機能など)の確立が必要であること・・・「軸」

この公益軸を中心とする投資家、企業、仲介人など公益・私益を一体とした持続的投資循環拡大メカニズムを持つことが全参加者の合意によって確立されなければならないこと・・・自主規制力を持った「持続的投資循環通商拡大メカニズム」の確立

また、この投資循環拡大型メカニズム全体の歪みを自ら計測し、評価し修正することの出来る全参加者で合意した自己修正メカニズム(revelation)の基点ともいえる共通の理念、哲学、真理・・・truth・・・自由・独立を護るための掟を必要とすること・・・「共通理念・真理」

具体的に開かれたマーケット全参加者で合意した共通理念、真理を守るための

憲法 1・8・3 通商規制 commerce regulation をベースとする「独占の乱用」を排除し「公正競争」を促進するための独禁法 anti trust 法 ・ ・ ・ (F・T・C ルール)

不正取引を排除するための証券法 ・ ・ ・ 10b - 5 , 詐欺的行為排除の為の anti fraud 法

持続的金融・資本供給コントロールの為の証券信用規制 securities credit control ・ ・ ・ Reg T ルール の 3 つの regulation である。

そしてこの 3 つのルールによって支えられた「金利・プライスメカニズム」を確立し時価型市場経済の命である「時価」についての品質を守るために必要な「市場経済品質 PL 機能」を持つこと。

併せて、FRB が control する長期国債金利をベースとする金利機能を活用した「金利メカニズム」を確立すること

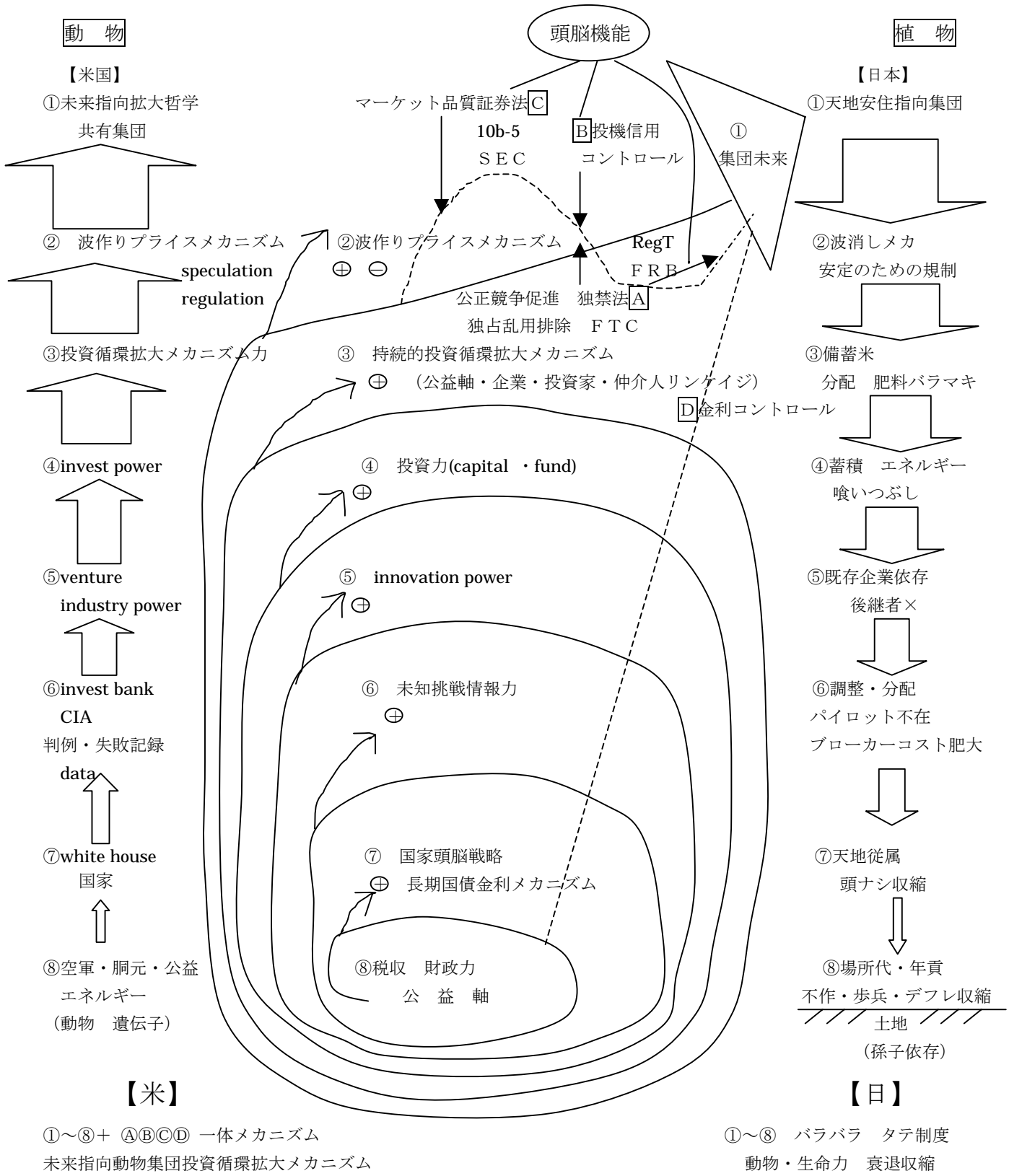
この公益軸をベースとした未来指向発展型の持続的投資循環拡大メカニズム『頭脳機能』(別表 -)と、speculation 波動をコントロールする「price と品質をコントロールするメカニズム」と、「金利メカニズム」という『心臓機能』(別表 ABCD)が結合されることにより、公益と私益、投資家と産業と仲介人、現在と未来とが一体となって持続的に発展することのできる commerce 活力が生まれ、産業が発展し、投資家・納税者・市民が潤い、**国家胴元の税収が増加し、国防、福祉力が充実し、世界に広がる新しい投資循環拡大が生まれる仕組みである。**

アメリカはこの仕組みをベースとして、1980 年代以降は今まで一時的に分離してきた銀・証・商・情報システムを再結合し国家としての自律的金融・資本機能を司る FRB 機能をベースとして証券市

場を国家の重要な財産(asset)として位置づけ(証券取引所法第 11A 条)、証券(securities)・基金(fund)の安全保障(safeguard)上の障害を除去するため証券の全国市場システムの mechanism を完成し(証券取引所法第 2 条規制目的に追加)ドル通貨を軸とする未来指向型の新しい国際投資循環通商拡大メカニズムを創り上げたのである。

このアメリカ独立(1787年)、南北対立(1865年)、金融大恐慌(1929年)、米ソ冷戦勝利(1980年代)、グローバルスタンダード覇権確立(2000年以降)に至る200年間の発展の原点は、常に異質者動物集団で形成する未来指向型の「持続的投資循環拡大メカニズムと動物集団を先導する投資銀行機能の強化」に国運を賭けて取り組んできたことにある。そのエネルギー源は日本のように天から与えられた「他人資金」ではなく自らの生命を賭けた「自律資本」「証券」「fund」にあるところにアメリカ型市場経済メカニズムの持つ爆発力の秘密があるのである。

未来指向波作り拡大経済と波消収縮経済メカニズム日米対比図



日本では何故、アメリカ大恐慌の原因解明の歴史が学べないのか、学ばないのか、学ばせないのか

・・・天動説農耕社会「資金」公平分配「手足」制度（日本）と、地動説動物社会
公正競争力を強める「自律資本」「頭脳」メカニズム（米）の違い

1 放置されているペコラ委員会報告書の研究

アメリカ大恐慌後 70 年を経て日本は再びアメリカ大恐慌を上回る大
国難に遭遇しながら、アメリカと言う先人が自ら大難局を乗り切って創
り上げてきた市場経済メカニズムの基盤についての工夫の歴史を何故
学ばないのか不思議である。

- ・具体的にはアメリカ南北対立、大恐慌などの克服記録として残さ
れている多くの貴重な文献が手付かずで放置されたまま、現在危
機に瀕している日本の国家再生に役立っていないことにある。

その文献とは・・・アメリカ大恐慌前後

南北戦争対立の中で生れた資本市場型中央銀行(FRB)設立(1914
年) の経緯であり

金融大恐慌後アメリカの国会自らが調査を行うことを決議をし
た上院銀行通貨委員会における調査決議の内容であり (1932 ~ 34
年 Res84 , 56 , 97)

その決議により行われた調査結果をまとめた委員会報告書 (通称
ペコラ委員会報告書 1934 年...394 頁) の内容であり

その委員会の中で行われた公聴会記録 (通称ペコラ hearing 記録
...12000 頁) に示されている立法過程における議論の内容 , なか
でも

その公聴会の中で行われた 1934 年証券取引所法に関する公聴会
記録に示されている立法過程における議論の内容であり

この証券取引所法第 2 条「現制を必要とする理由」に示され
ているメカニズムの基本設計哲学の確立と修正であり

その前後 200 年以上に亘る国会などによる調査記録、諸法令、判
例などアメリカ原発型証券・金融・資本市場経済メカニズムの頭脳
と心臓の働きを示す基本哲学 , fundamental , 持続的投資循環拡大

メカニズムと投資銀行業務の発達に関する科学的学術記録の解明である。

悲しいことに農耕民族社会の日本ではこの自由・独立という建国理念を実現する為に200年もの月日をかけて工夫を積み重ねてきた地動説動物社会メカニズムの頭脳・心臓機能の「基本原理・心理」を理解することなく、天動説農耕社会の手足としての機能としてバラバラにとり入れ、その新しい働きを真似るだけで国際化、市場経済の国際化が進められるものと錯覚し続けてきているのである。

2 日本でアメリカの証券・金融資本市場の歴史が学べない学ばない4つ原因

・・・農耕型資金資本主義の発想では理解できない動物型生命資本主義のメカニズム

農耕民族には理解できない動物集団の持つ・・・官と民を束ねる「公」の発想で活動する「狩りの仕掛けのメカニズム」の発達史

天地に守られて来た農耕民族には、生きるために求められる「種まき」と「勤労」と「備蓄」はあっても、自らが餌物を捕らえて生きるために必要な「狩りのしかけ」...invest, 目, 耳, 口, 爪, 翼, 資本, 経済活動, kill, 効率, 約束ごとなどの狩りのためのインフラメカニズムそのものを必要として来なかった。

こうしたなかで日本の民間企業集団は自ら動物集団の一員として資本主義市場経済競争に参画し国際的な狩りのメカニズムを理解し自らリスクに挑戦しその成果をあげて来た。

しかし国家の本丸だけは、これとは正反対に天地と安保と納税者に守られた伝統的な天動説農耕型信頼社会制度の中でこの「狩りのしかけメカニズム」を学ぶことなく2千年の伝統に依存し安住し続けて来たのである。

国家全体の狩りメカニズムをコントロールする人工ロボット型の「頭脳力」と「心臓機能」・・・産業活力を生かす地動説型社会科学の欠落

問題は天動説農耕型社会システムを持つ日本にはこのアメリカ型の「狩りのしかけ」を「公益」で束ねる動物集団の持つ投資循環通商メカ

ニズムも、又国家胴元として必要な頭脳と心臓の働き・・・などを設計する地動説型社会科学シンクタンク機能そのものを備えていないことにある。

アメリカ建国 200 年の歴史とは自由・平等・独立宣言・憲法をベースにして大恐慌の経験を生かして国防・福祉・税を公益軸とする産業、投資家、仲介人を結ぶ資本市場投資循環通商拡大メカニズムを自ら創り上げそれを推進し制御できる人工ロボットの動物集団としての「国家の頭脳と心臓機能」という自然科学・社会科学一体の発達史ともいえる。

一方の農耕社会の日本ではこれらの市場経済インフラメカニズムの一部を在来型の間接金融システムの資金循環、公平分配、タテ社会制度などを通じて資金を集中的に分配し、その手足の機能である産業力を活用し生活必需品... commodity 経済競争効率をあげることに成功してきた（1980 年まで）。

しかし、問題は未知未来空間のリスクに挑戦し産業活動を通じて新しいエネルギーを得るベンチャー、イノベーション型の security 市場経済化時代に突入しながら、必要とされる国家としての目、耳、口、爪、翼などの「動物集団型の投資頭脳力と心臓機能力」を持つことなく、国際・証券・金融・資本市場経済競争に参画して（させられて）しまってきたことにある（1980 年代以降）。

このため日本の証券、金融、資本市場メカニズムには財政、金融、「産業」、証券、投資活動力を束ねて国家全体が一体となって未来を先取りする公益を軸とする動物集団としての投資戦略機能も、その頭脳と心臓機能もを欠いたまま、アメリカ型の証券（産業）、金融、資本経済メカニズムとは似て非なる金融・資産エネルギーだけで作る流通投機偏重型

の証券（券面）流通市場だけが中途半端に機能するだけの「産業力・徴税力」を欠いた農耕民族型の歪んだ証券・金融・資本市場を作りあげざるを得ない結果となってしまうのである。

こうした中で日本では自らモデルとしてきたアメリカ型の証券・金融・資本市場メカニズムの手足の部分だけを、日本型のタテ社会制度を支えてきた間接金融型インフラシステムの一部として取り入れてはきたが、肝心の資本市場メカニズムの「fundamental」にある頭脳部分と、エンジン（産業・ベンチャー）の働きをする心臓機能に必要な社会科学は研究されることもなく手付かずのまま放置されてきたのである。

自律国家の生命を支える持続的投資循環拡大メカニズムを確立し公正競争を実現するために必要な真理（truth）軸の欠落・・・地動説型動物競争社会における公正競争メカニズムに必要な「真理」と、天動説農耕社会村人社会の「真実」の混同・・・乱用「abuse」と「不正」の違い

日本におけるペコラ委員会の調査目的とは私人の個別取引の不正摘出のためにあるものと曲解されアメリカのように「国家としての資本主義市場経済メカニズム」の基本哲学・「真理」・原則を確立する為の「立法調査」であると理解している人は殆どいない。

何故この様に曲解されているのであろうか？

元中央大学教授呉天降教授は、福沢諭吉が看破した「信」だけで作る村の世界と、「信・疑」で成り立つ未来・宇宙世界それぞれに使われている同じ「truth」という言葉の解釈に問題が隠されているのではないかと指摘されている。

アメリカが金融大恐慌前後の経験を通じて求めてきた「truth」とは何を意味するものであろうか？

アメリカにおけるマーケットメカニズムの「truth」とは、地動説を共有する異質者間で行われる市場経済の「競争の促進」と「不公正取引の排除」という2つの相反する矛盾を克服する為の工夫として捉えている。・・・それは付加価値・利益追求型の「奔馬」と、公正競争を求める「御者」が攻めぎ合うことの出来る「動物競争型のマーケットメカニズム」のバランスをどのようにして創り上げるか・・・から生れている。

具体的には「信」「疑」一体の未知空間における異質者間で公正な市場経済競争を推進すること（独占・カルテル排除）。

そこで公正な市場価格形成を確保するために必要な一般社会の掟より厳しい特別の掟・・・詐欺的・相場操縦的行為排除ルールを持つこと。

情報内容と需給の偏重によって発生する市場競争価格（price）と実態経済（value）のブレを常に掌握・修正し国家としての政策判断を誤らせないよう（過剰投機過熱・失速防止）にする工夫である。

日本ではこうした「奔馬」を生かしながらこれを抑制する「御者」によって出力をあげる異質者間「信・疑一体型」のマーケットメカニズムの軸を保つ為の工夫を動物競争社会における真理（truth）として捉えるのではなく、「信」を共有する農耕型村社会の同質者の間だけで真実（truth）を述べ合って「財」を交換する「奔馬」と「御者」も必要としていない村のバザールを証券・金融・市場としてとらえてきたのである。

従って、日本の市場経済メカニズムの中には

「信」（真実・勤勉・蓄積）中心で「疑」（売り）は排除され、

意思を重視し結果責任を求める詐欺的行為排除の思想はなく、
又、産業力エネルギーをベースとする実態経済価値（value）と
金融エネルギーによって歪められ易い市場経済価格（price）の gap
を容認し、識別し修正する慣行も持っていなかったのである。

この同質者信頼農耕社会における個別取引の「真実解明」（日）と、
異質者動物間で集団利益を追求するための公正競争メカニズムの仕組
みの「真理解明」（米）の違いを理解しない限り「メカニズム」の歪み
をなくすための「真理」を求めて調査したペコラ報報告・hearing 記録
（12,000 頁）の意味も、証券取引所法第 2 条「規制を必要とする理
由」・・・

国益を実現する競争促進型のマーケットメカニズムの・・・「真理」
を歪める原因を探しそれを妨げる要因を排除するための方法も・・・FTC
SEC FRB などの規制内容も、その立法趣旨とする公益を軸とするマー
ケットメカニズムの本質も・・・つまりアメリカ型証券・金融・資本市
場経済メカニズムそのものを理解することが出来ないのである。

問題はこのアメリカ型の地動説共有 antitrust 社会の中で集団利益を
追求する為に必要な「私益的独占」の乱用（abuse）を封じて公正競争
を実現する「マーケットメカニズムのしくみの真理」と、守られた天地
の中における日本型 trust 社会の中の「信」の中だけ行われるバザール
交換取引に求められる「個人の不正を排除するために必要な真実の解
明」という機能を示す言葉が、同じく「truth」という言葉で表現され
ていることにある。

このため、アメリカの証券法を直訳して作った日本の証券法には、ア
メリカ型の人工的動物集団としての付加価値追究を公益とする・・・つ
まり「税込」をあげるために必要な「奔馬と御者」型の関節機能を備え

た動物としての仕組みが画かれていないのである。

このように日本の証券市場のメカニズムには長期的視点に立って国家として再投資出力をあげ徴税力を高めるための頭脳と心臓機能と、fundamental 追及のためのマクロ経済用の社会科学機能そのものが欠落したまま放置され、手足活動部分だけがバラバラに取り入れられたままになっているのである。

資産価格変動損失の発生原因の解明を避けてきた日本の失敗

こうして考えて見るとアメリカでは、マーケットメカニズムの一時的なブレ、狂い、歪みを是認しながらメカニズムの乱用（abuse）によって発生する実態経済の価値（value）と市場価値（price）のブレの現実を把握するシステムが予め内蔵され参加者の失敗経験などを通して日々その修正が行われる「価格変動容認活用波作り型」のマクロ経済用のシステムであるのに対して、

日本ではその「ブレ」は本来発生しない、発生してはならないとされ、閉ざされた天動説社会の中の「信」の空間の中で成り立っているクリーンで安定した市場経済メカニズムが求められてきた。

そして未知のグレイゾーンマーケットで発生する「価格変動益は天の恵み」として受け止めるだけで、逆に「価格変動損失は天災」として受け止められその現象を人為的な仕組みとして捉え原因究明、責任追及とともにメカニズムそのものを評価・修正して対策を考える習慣を持ってこなかったのである。

このため、タテ割り社会内の小さなブレとか失敗はそれぞれの天動説空間内の真実開示によって修正することは可能であったが、集団全体の保有する土地・株式などの資産価格の変動を、証券・金融・資本市場・財政・徴税力・産業活動・蓄積資産経済力など国民経済全体のトータル出

力を示す基本メーターとして捉え、その大きなブレとか失速原因等を自ら検証する地動説空間内の真理究明活動そのものをタブー視し全てを他律的天然現象であるとして、放置してきたのである。

そして日本ではこの大きなブレ、失敗、失速、損失の根源である土地・株式などの資産の市場競争価格「時価」の変動に伴って発生する「長期資産価格の異常な変動損益」を動物資本の投資効果の一環として捉え、その原因を自己解明するメカニズムを備えないまま名目的評価益を富と考えて「利益先取り損失先送り」を許す浪費・とばし・だまし習慣をつけてしまったツケがデフレ、徴税力低下、ゼロ金利、サラ金国債となって今現在我々を苦しめているのである。

アメリカはこの資産価格の変動損益こそ、投資成果を示すものとして時価型市場経済メカニズムによって形成された時価の重要性を直視し、その副作用として発生しやすい現実の需給によって形成される「現実の価格」と「あるべき真理価格」の、異常なブレの発生原因を検知し、予防するために国家胴元公益を守るべき議会・行政を中心に投資家・預金者・企業・仲介人・納税者一体となって国運を賭けその障害を除去し、健全なマクロ経済を発展させる人工メカニズムを創り上げる工夫をしてきているのである。

3 自律・未来指向に欠かせないマーケットメカニズムの重要性・・・ 株式投資を封じられているお上集団では理解できない資本市場マー ケットの頭脳のおくみと動物型証券・金融・資本市場経済発達通 史・・・なかでも投資銀行機能の研究の重要性

日本では天地で守られた限られた空間の中の、限られた村人の「真理」で作り上げた「信」の空間でしか通用しない天動説・性善説社会システムをベースとする「同質者間限定競争型証券・金融・資本・流通市場システム」を、アメリカ流の異質者間持続的投資循環通商拡大マクロ型の「マーケットメカニズム」であると誤認し続けて来たのである。

そして為政者も参加者も自らの白・黒社会の「信」だけの空間に閉じこもり、マーケットのメカニズムの是非については「市場のことは市場に聞け」と聞き流し、表面の現象に一喜一憂するだけで、自らアメリカ流のマーケットメカニズムの発展・進化の歴史、本質、哲学、真理・・・資本、独占、乱用、競争技法を学ぶことなく手足だけの市場経済メカニズム導入後 60 年の時が流れた。

この間日本では無限に広がる地動説動物社会共有空間内での競争に欠かせない証券・金融・資本市場のメカニズムを、動物集団の英知と駆け引きを生み出すための社会科学の結晶として捉えることなく、天から与えられた制度であると誤解し村人間の「真理」だけに頼り続けて来たのである。

そして在来型の財政・金融・市場の交換・公平分配制度に依存するだけで、そのメカニズムの成長発展を支えてきた innovation の歴史、メカニズムの本質・哲学・制御機能など社会科学の発達の経緯（通史）を学んでその知恵を貯えることを怠ってきたのである。

その最大の原因はお上集団そのものが株式市場をべっ視し「投資リス

ク、インサイダー差別とリスク」があるとして、株式市場における投資技術の研究を避け仲間うちの「信」だけで作る「半信実」の世界に自らを封じ込め「資本」市場メカニズムの重要性を無視してきたことにある。その結果世界史に例のない土地・年金・資産を巻き込んだ財政・金融・大資産バブルを引き起こしたうえさらに外資などによる売り収奪手法を放置し、傷口をさらに拡げてしまったのである。

このマーケットメカニズムの「truth」とは、仲間うちの「信」だけを求め合う「真理」だけではなく異質者相互間で「信」「疑」を競い合い未来へ向かって動物集団の英知を導き出す再投資競争の掟である真理と理解し、国家自ら国運を賭けその設計責任を果たさなければ蓄積資金（資本）の再投資機能が失われ国家そのものが取り残され、崩壊してしまう恐れが出てきたのである。

こうした中で、財政、年金破たん損失、土地・長期資産などの価格変動損失を次世代に飛ばすという麻薬に依存した垂直自爆型の財政・金融・資本・年金・資産市場のメカニズムの欠陥が少しずつ見えるようになって日本でもやっと「証券市場」の「メカニズム」の重要性を理解せざるを得ない時を迎えたのである。

問題は自らの頭脳機能を天と安保に委ねて資金分配型福祉経済調整手法だけでマクロ経済の膨張・収縮に順応するのではなく、人知による未来指向型市場経済メカニズムの基礎工学と発達通史を学んで自ら設計図を画き、資本市場経済メカニズムを通じて、動物型自律集団としての濃縮遺伝子の再投資メカニズム・・・なかでも国際投資銀行型の先導機能を確立しなければ生きていけない時を迎えているのである。

証券、金融、資本市場経済メカニズム用語
の分裂が招いた日本の市場経済メカニズムの
混乱

・・・アメリカ型人工頭脳「資本」市場経済投資循環通商拡大メカニズム用の の基本哲学用語を、日本型「資金」分配制度用語に転用し、自ら自律的投資活力を失って失速し迷走する日本

表1

アメリカ型人工頭脳資本市場持続的投資循環通商拡大メカニズム の基本用語

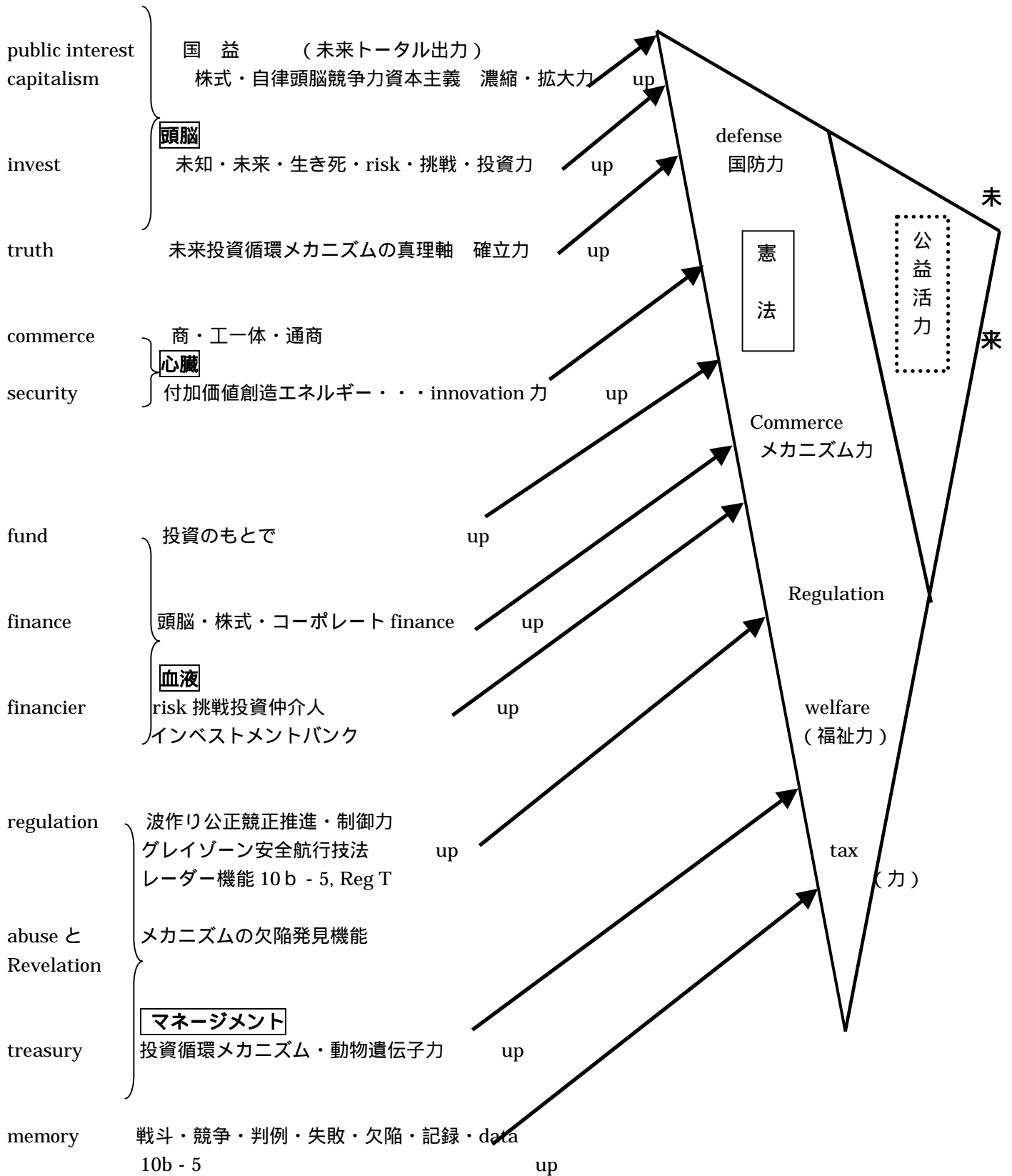


表2 アメリカ型投資循環ヨコ通商拡大メカニズムの用語を
 農耕型資金分配循環タテ私益制度用語として転用し収縮する日本経済

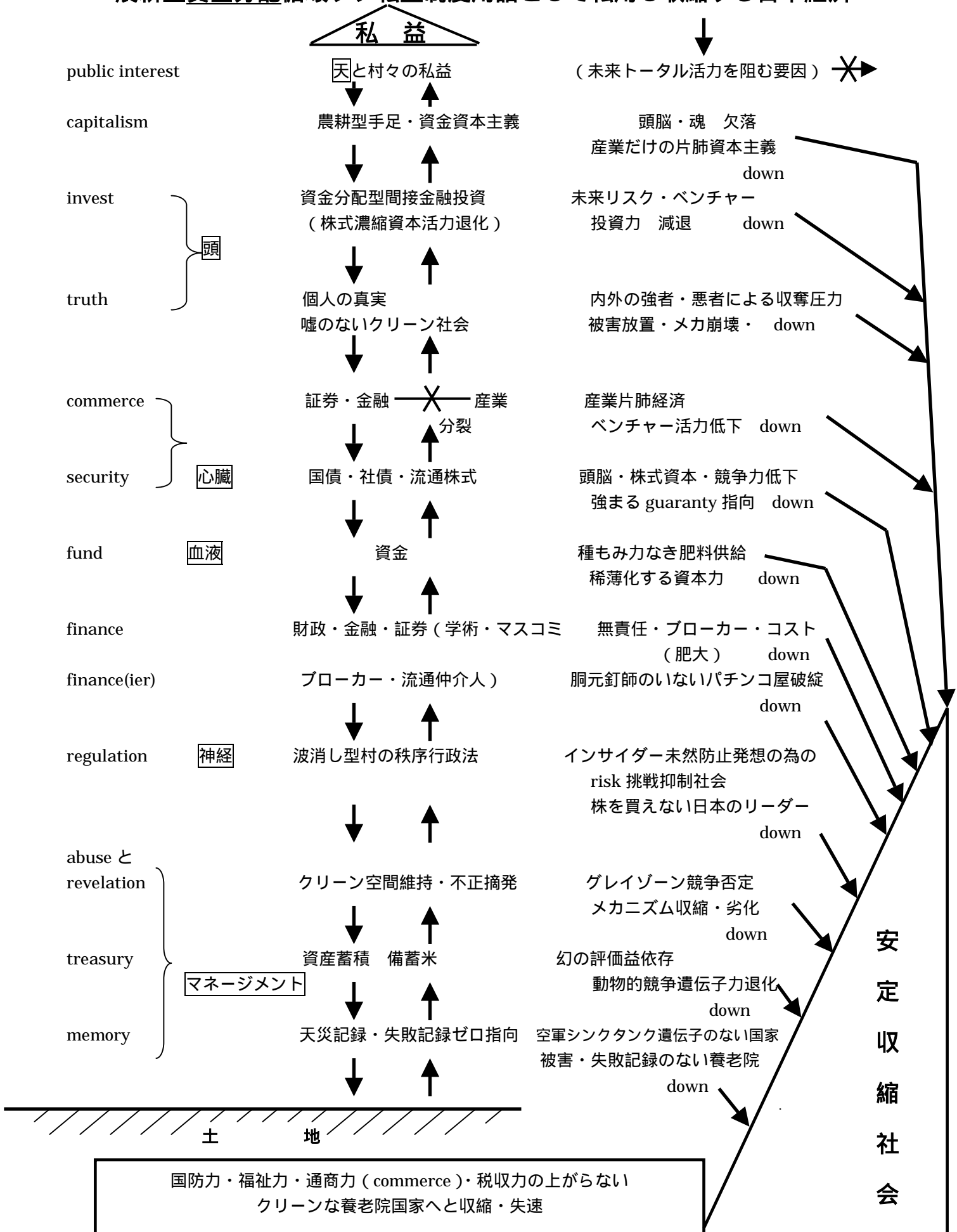
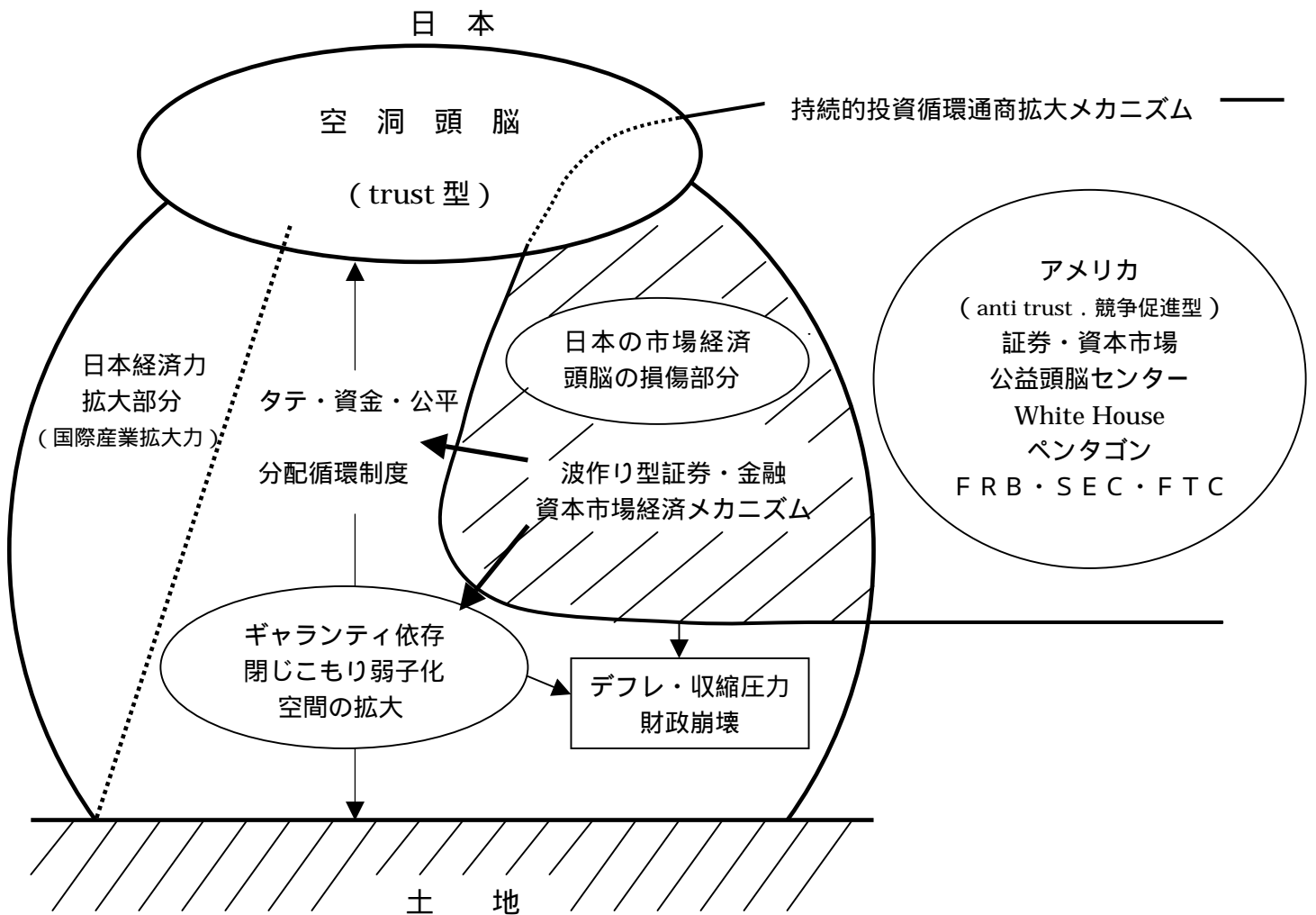


表 3

日本（手足）、アメリカ（頭脳）資本市場メカニズムの交錯によって拡大する実質
壊死空間

- ・・・産業手足は上げられるが、資本主義市場経済頭脳競争機能を喰われ弱
子化が進む日本



(要約)

アメリカ型資本市場投資循環メカと日本型資金分配メカの 違い

…異質者人工集団が200年かけて創りあげた人工原発型持続的投資循環拡大メカニズム(米)と同質者が活用する天然水車調整型経済システム(日)

1 エネルギー源

- ・ アメリカ…自律型自己発電機・エネルギー・エンジン付飛行機…
commerce 通商・産業主役…自然科学と社会科学の発達が必要…
- ・ 日本…天地軸他律型天然エネルギー・雨・風・水・太陽…エンジンのないグライダー…財政・金融主役…天の恵み・勤勉と祈り…

2 操縦者

- ・ アメリカ…連邦国家…連合国防
投資銀行先導、国防省…
- ・ 日本…村々を集めた国家
財政・金融・分配リーダー

3 出力測定

- ・ アメリカ・・・目的・戦略・効果・設計・しくみ計算品質・量・欠陥の一体測定
- ・ 日本・・・天然エネルギーの測定と公平分配計算のみ・・・過不足と不
符合はダム調整依存（レシートと報告書、行政裁量と備蓄米と世
代間とばし）

4 法・メカニズム

- ・ アメリカ・・・科学的結果責任、原因説明責任、物 P/L 法、戦争禁止
手（abuse 法）・・・国家的戦略遂行・・・攻めのメカニズム
- ・ 日本・・・村々の神従属、意思主義、一罰百戒、守りの制度

5 メカニズム結果責任

- ・ アメリカ・・・国債返済責任付自律国家
- ・ 日本・・・国債返済責任持たない他律国家（とばし）
 - ・ 第 2 次大戦 国債実質デフォルト
 - ・ 孫・子とばし赤字財政
 - ・ 水に流す欠陥メカニズムを許容する農耕民族の習性

6 日・米動物競争力較差によって日本に発生する実質壊死空間の拡大 （表 3）同じ市場経済用語を使った動物・戦争・投資・生き死に・収穫

メカニズム（米）と農民・平和・安全・資金・公平分配メカニズム（日）
との交錯によって発生する実質壊死空間の拡大
・・・競争恐怖症・弱子化・不良債権・財政破壊

イギリス型 消費者保護・「金融サービス市場法」的経済発想だけでは脱出できない日本が陥っている証券・資本経済のブラックホール

・・・メンバー-trust 社会(英国の金融)と antitrust 社会(米の証券)とお上 trust 社会(日本の国債)の特色と生かし方

アメリカ型証券・資本市場メカニズムか イギリス型金融・消費者流通市場メカニズムか

1 アメリカ型証券市場メカニズムの歴史

・・・南北対立、農工対立 trust anti trust (公正競争推進) 競争
推進強者による独占 abuse 発生 1929 年大恐慌 ペコラ調査による
abuse の実態解明成功 通商活性化のための abuse 制御システム確立
1934 年証券法・SEC (10b - 5)・FTC・FRB (Reg. T) 1975 年グロ
ーバルルール化へ

2 イギリス

・・・ abuse によるブレの少ない trust 社会における金融・商品・流
通・品揃え市場
アメリカ型 anti trust をベースとするベンチャー産業競争育成モデル不
在・・・消費商品と金融商品の品揃えだけあって頭脳・投資・資本・産
業競争力機能不在 (株式・資本市場・I B K・・・)

3 日本

イギリス型メンバーtrust (商業信用・流通) 金融型市場経済メ
カニズムと、アメリカ異質者人工公益・anti trust (公正競争通商
推進)証券型市場メカニズムのダイナミズムの違いが理解できない
まま、その谷間にはまって分裂してしまった日本の市場経済を更生
させるには、自らの知恵で trust 型公平分配メカ (財政・金融・・・
お上) と anti trust 競争から生まれる産業活力 (民) とを結ぶ税金
のとれる再投資循環通商拡大型市場経済メカニズムを創り上げ両
立させる工夫をするより道はない。

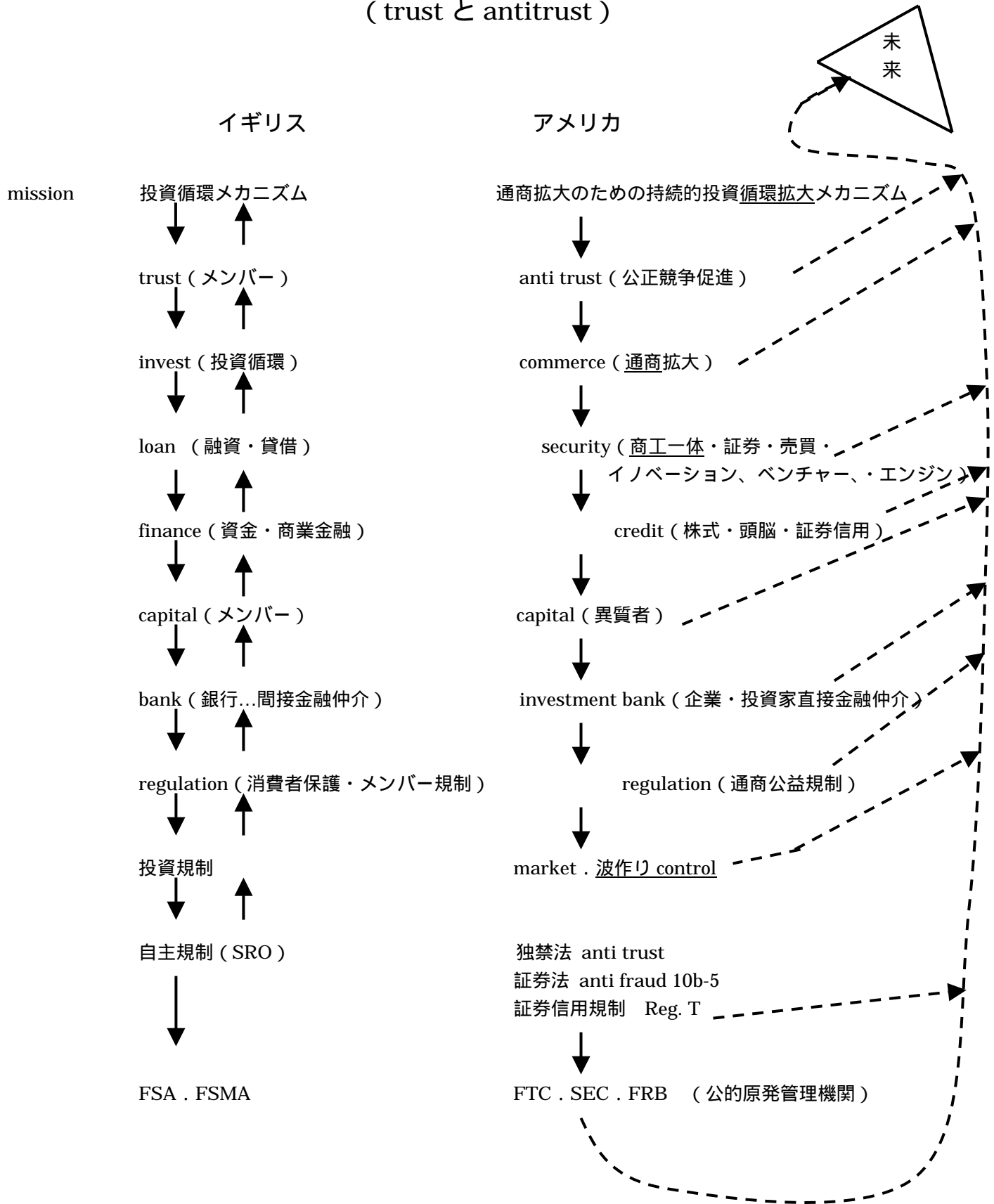
英・米・日 金融・証券・資本市場メカニズムの違い

	英	米	日
目的	消費者保護	国民経済メカニズムの 確立	村々の安全・安定
空間と軸	「Trust」メンバー	「Anti trust」 未知・未来空間の人工 公益	天地軸空間（公益軸 の欠落）
市場の機能と 特 色 market	手形・金融商品の流 通交換・市場（血液）	証券（ベンチャー産業 活力）・資本（頭脳）濃 縮・拡大・空売り， 貸株，M・A	財政・金融資金分配・ （手足）・流通
finance	金融（資金）finance （手形担保）商業信用	Capital finance （資本） （株式担保） 産業・証券信用	資産資金・finance（土 地・人・株券・担保）
メーター	金利と流通量	トータルエネルギー・ 時価	形だけの金利・価格 形成メカニズム（財政 調整）
法 regulation (rule)	Trust・gentleman Rule	・ 憲法・・・国防・福祉・ 税のための通商公益 規制 ・ 強者独占乱用 (abuse)防止ルール ・ 詐欺的行為排除 10b-5 ・ 証券信用規制 RegT による投資循環波作 りメカニズム確立	・ 村々のルール（バラ バラの行政法） enforcement のない 一罰百戒 波消し 白黒法

<p>ポイント</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「産業」のない商業・金融センター機能の限界 ・自己発電機能のない(風車) 	<p>強すぎる人工竜巻(トータルエネルギー吸引・拡大メカニズム)の肥大(原発)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主力エンジンである産業と金融を結ぶ「法」・「金」資本市場メカニズム分裂 ・分配先行・再投資循環機能崩壊 ・資産・価格・品質評価メカニズム混乱 ・デフレ経済脱出の鍵を握る「税金のとれる国益トータルメカニズム設計力」欠落
-------------	--	---	--

イギリスとアメリカの証券・金融・資本市場メカニズムの違い

(trust と antitrust)



これからの日本
・・・内向き資金依存資本主義から外向き
生命資本競争主義への挑戦

生命がけで動物活力を競い合う「資本市場メカニズム」競争の時代を勝ち抜くには、innovation活力を持つ「産業力」を主役においた再投資循環拡大メカニズムを作らなければ生き残れない時代を迎えている。

現在の日本はアメリカ南北戦争時代の混乱・模索を再現している。

それは世界に通ずる新しい工業活動力と証券・金融メカニズムを駆使して発展する東部とは対照的に、奴隷制度の残影をひきずりながら農業をベースとする経済後進性に悩む南部との対立の中で、未だに統一された本物の連邦国家としての市場経済メカニズムが確立できないまま本物の中央銀行、FTC、SEC を求めて模索を続けていた 1850～1900 年前後のアメリカの姿と似ているからである。

アメリカはその後大恐慌の混乱を経てやっと、統一連邦国家として「奔馬と御者」の機能がはたらく、独禁法（FTC）、国家の自律型・証券・金融・資本機能を司る中央銀行（FRB）、産業活力を生かす証券法（SEC）を創り上げ市場経済国家としての基礎固めに成功した。（1934年～）

今の日本にも形だけの国家、憲法、財政機能、中央銀行、FTC（公正取引委員会）、SEC（証券取引委員会）はある。

しかし、それはバラバラのまま統一国家としての持続的再投資循環拡大機能を司る頭脳としては殆ど機能していない。

こうした中で日本は

アメリカ型証券・金融・資本市場の本質を自ら検証・解明することを怠り、アメリカ大恐慌を上回る大資産バブルを引き起こしただけでなく

そのバブル脱出にあたり、国民経済再生の鍵を握る虎の子の株式資本を外資に奪われつつある

又、アメリカ型証券・金融・資本市場との競争を避け、イギリス型投資サービス法に逃避し、国家再建の鍵を握る産業、金融資産システムを国際資本市場メカニズム強者集団に無条件解放するという敗戦

思想さえ拡がりつつある。

求められているのは国運を賭して日本に合った本物の自律型資本主義・証券市場再投資循環経済メカニズムを創り上げることにある。

世界中が動物集団化するなかで、

天地、安全、物真似、横並び、接ぎ木、国債資金供給システムに頼って、本物の守り（security）も生きるための投資（security）も忘れ安全と公平分配を求めて迷走する日本型農耕民族集団は、やがて動物的競争遺伝子が衰え、世界中の強者によって解体され支配され衰退する運命にあることは明らかである。

これからの日本

…鍵は内向きに作られた本丸のシステムをどれだけ外向きに変えられるか否かにかかっている

- 1 市場経済の頭脳・果実（株式）は外資の手に、ゴミ・不良債権・国債・借金・劣後遺伝子は、日本の次世代負担という **亡国の構図からの脱出**
- 2 財政、金融メカニズム崩壊 **原因の解明** あっての再建・・・アメリカ動物集団型証券・資本市場経済競争暴発力に破壊され、崩壊しつつある天地・安保依存農耕調整型のお上の経済システムからの脱出
- 3 **自律型国民経済メカニズム** 作り・・・国債依存とばしを許さない自前の憲法、民主主義、資本主義、財政、証券、金融、資本市場メカニズム作り
- 4 財政・金融、資金分配経済システムから産業、資本、税を軸とした再投資循環通商拡大メカニズムの確立・・・ **「資金」から「資本」** へ
- 5 **官から民へ**・・・分配から競争への道を生かす「公」を軸とする波作り型インフラメカニズムと、未知を裁く法の確立へ・・・「奔馬と御者」・・・clean・資金空間・白黒法から grey・資本・頭脳競争空間用独占 abuse（乱用）克服法へ・・・未知の grey 空間の中に未来がある
- 6 改革の第一歩は先ず **シンクタンク機能の空軍化** へ・・・天地軸依存・上下伝達型シンクタンクから宇宙多元軸、異質者交流可能な新時代を先導する証券・資本・金融・産業一体型の投資銀行機能作りへ